

総合人間学の方法論試論

—「人間の自律」をキーワードとして—

An essay on Methodology of Synthetic Anthoropology: Human self-reliance as the key word

長谷場 健

HASEBA, Takeshi

はじめに

総合人間学会は2011年3月11日に発生した東日本大震災を総合人間学の理論と実践性が試される緊急かつ重要な課題と捉え、翌年の第7回研究大会で「3.11と総合人間学—人間（ヒト）・未来への選択」と題するシンポジウムを企画し開催した。そこでの主催者側の趣旨は「物質的充足、精神的解放を求めてきた近代合理主義・科学技術文明は飽くことなき物質的欲望と巨大科学技術を生み、その結果、地球環境を危機に陥れ、また、個人および社会の病理を噴出させている。そのような中、3.11および福島原発事故が発生した。これまでの現代文明を見直し、自然のより深い理解に基づき、人間にとって真に豊かな文明とは何かを展望する」というものであった。シンポジウムのサブテーマとしては、1. [専門家の社会的責任のあり方] 松本三和夫氏（科学社会学）「構造災の科学社会学—発電用原子炉をめぐる決定不全性」、2. [科学・技術のあり方] 野家啓一氏（科学・歴史哲学）「3.11以後の科学技術と人間」、3. [自然と人間（ヒト）のあり方] 木村光伸氏（地域生態論・霊長類学）「人間らしさの生態的基礎—自己家畜化論の再検討として」、4. [文明のあり方] 佐藤節子氏（法哲学）「近代の人

間観からアニミズム的思考へ」の4つが選ばれ、総合人間学の実践が目指された。本稿では、そこで実践されたパネリスト間でのキーワード（KW）の共有による4つのサブテーマの総合の試み、さらには数年後再びそのシンポジウムを振り返りより一般的かつ抽象度の高いKWを用いて再び総合を試みた実践について述べたい。

1. キーワード（KW）の事前設定によるシンポジウムの総合の試み

私はその時の大会実行委員長として、総合人間学会ならではのシンポジウムとは如何にあるべきかを思案して、各パネリストに学会が目指してきたものやこのシンポジウムの趣旨を説明すると同時に、本シンポジウムが各サブテーマを有機的に関連付け総合を目指すものであること、そして、各自の講演内容に「3.11、人間、生物としてのヒト、未来への選択」の4つをKWとして容れていただきたい旨をメールで数回に渡って伝えた。そうすることにより、各パネリストの発表内容の関連性が強まり、聴衆も各内容を関連付けて理解でき、討論を通して総合化が可能になるのではないかと期待した。この試みは、これまでの大会シンポジウムとは異なり、テーマの

みならず KW を共有することによって各発表内容の総合を目指した初の実践例であった。

しかしながら、メールのみでの連絡では主催者側の趣旨を各パネリストに十分伝えることができず、実際の発表内容は必ずしも KW を意識したものとはいえない独自の内容に留まった。そのため、私は各発表内容をどのように関連付けて纏めるかで司会者として大いに悩んだ記憶がある。さらに、聴衆を含めての討論にも（司会のタイムキーピングの不手際もあり）時間を十分確保できず、総合を目指したシンポジウムとしては決して満足の行くものではなかった。KW の選択に関しても、「人間、ヒト」という KW で社会文化的側面と生物的側面の統合としての人間（ヒト）の理解を目指すことを意図したものであったが、パネリスト間でその意図が共有されず必ずしも適切な KW 設定とは言えなかった。また、たとえ KW の設定が適切であったとしても異分野のパネリストが事前の協議なしに KW を共有して各自の発表内容を意識的に交差させることは容易ではないと思われた。私が行ったシンポジウムでの総括および大会後に報告したレビューも4つの発表内容の理解、連付けが不十分なまま浅い内容に終わってしまった。シンポジウムのコメンテーターの一人は「パネリスト4名の講演は同じ KW を含んでいてもそれぞれ異なる対象を問題としており、理解の枠組みも全く異なっており、総合人間学としてのシンポジウムを行うことの難しさが如実に表れていた。議論が深まらずなし崩しのシンポジウムはどの学会にもある“深く限定的”なもののことだが、総合人間学会ではそれが顕著になる」と述べていた。幸いにも、このシンポジウムは学会初の試みとして各講演を動画でホームページに UP したこと、さら

に、各パネリストの講演内容は論文として『3.11を総合人間学から考える』（総合人間学会編 2013 年）に掲載されたことで内容を振り返ることができた。そして、その後数年の熟成期間を経て、各講演内容の関連が少し見えてきたよう思え、改めて私が捉えた各講演内容の骨子を以下に纏めてみた。

2. 大会シンポジウムの各講演内容を振り返って－その要旨と関連性

〔専門家の社会的責任のあり方〕で、松本氏は「現代は巨大科学技術と社会システムが一体化することにより不確実性とリスク社会が出現し、その技術の加害責任は限定不可能な無限責任であり、それを有限化するための新たな責任分配制度の創出が必要である。そのためには選択された政策および責任の所在を明らかにできるように政策の前提とそれに至るプロセスを明示する立場明示型の複数の選択肢が提示されるべき。」と述べた（この時の講演内容に関しては 2012 年に出版された）。野家氏は〔科学・技術のあり方〕で、「巨大科学技術の在り方、不確実性の中の意思決定に関してはシビリアンコントロールが重要となり、科学的合理性のみならず社会的合理性の相補的協働が必要。また、その加害は、民主主義的決定に参加できない未来世代にも及ぶため、世代間倫理の構築が必要である。」と述べた。以上のように、松本氏は結果責任について社会制度上の空白を埋めることによって、野家氏は予防責任について制度上のみならず政治的、倫理的空白を埋めることによって問題の克服を図るべきとした。これらの主張は、科学技術が人間、社会的責任、社会制度、環境、自然さらには未来世代との関係で如何にあるべきかの議論と捉えることができる。なお、

松本氏の講演内容は巨大科学技術および経済発展至上主義の近現代文明を本質的に転換すべきというより、近代的合理主義および科学技術のさらなる発展によって現代社会の問題を克服しようとする思想の流れにあったように思える。一方、野家氏の「世代間倫理」は民主主義および人間と地球環境との関係のあり方を問う文明変革論の一つといえる。ただ両氏とも、原発事故災害を現実には被った人々や社会に対する過失責任を現行の法制度で問うことについては触れず、責任の在り方論に不安全感が残った。背後にある政治的、経済的意図の責任も含めて市民感情に沿った責任論とは何かを問うことによって、複雑さに紛れて免罪されがちな現代文明社会の問題が明らかとなり、改革への展望がより具体的に見えてくるように思える。

木村氏は「自然と人間（ヒト）のあり方」で、「人間（ヒト）は自ら造った人工環境への適応の結果として自己家畜化してきた。そこで働く自己人為淘汰・自己選択には目的も目指す方向性もなかった。あったのは欲望の限りなき連鎖である。そして、生存のための生物的欲求が人間（ヒト）では近代化、経済発展至上主義によって制御困難な社会的欲望に変質した。動物からの解放としての自己人為淘汰が人間（ヒト）にもたらした欲望の連鎖は人間が生き延びるためには生物圏で何をしていてもよいという共同意思（自由幻想）を生んだ。この欲望の制御なしでは化石エネルギーを再生エネルギーに転換するだけでは近・現代文明が抱える問題の本質的解決は望めない。人間の欲望はヒトの特殊な生物進化に関係しており、人間が本当に自己の存在責任を自覚する日はまだ遠い。自然との共生、持続的文明への転換はかなり困難と思われる。」と述べた。

佐藤氏は「文明のあり方」で、「3.11を近代の共同主観に基づく人間観（人間は理性、自由、意思、人権、尊厳などを内属している）が必然的に破綻した結果であり、この虚構の実体化思考が欲望の連鎖を生み地球的危機を招いた。人間は生物である、だから、人間を他の生物との不連続的な神に代わる立場に置くのではなく、生命の共通性をもとに理解する必要がある。そして、他の生物との優劣や上等、下等を論じること禁欲でなければならない。未来の選択として、人類初期の共通の文化、価値観であったアニミズムを再評価し、自然を切り取って対象とするのではなく、まるごと相手にするアニミズムを基調とした科学文明を。」と述べた。木村、佐藤両氏はいずれも近代合理主義の追求と科学技術の発展が人間の欲望を制御不能にし、自然との同調性を喪失した結果、自己の存在基盤を危うくしている、そこには人間の共同主観（意思）としての自由観・自由意思の観念が関係していると考え、肥大化した欲望を抑制し人間の本質的理解に基づく新たな文明の選択が必要と主張した。

以上の4つの講演内容は

1. 近代科学文明はリスク社会であり、その加害は無限責任である。そこには制度的および倫理的空白があり、それらを埋める必要がある。
2. 3.11は近代文明の論理的矛盾の破綻と捉えるべきで、近代的人間観の虚構から生じた人間の制御なき欲望が原因、その抑制が必要。
3. 人間がより“自然”に生きてゆくための文明に転換するためには人間と自然そしてその関係をより深く理解し、調和と協働が必要。

と3点に要約することができる。そして、地球環境を改造し経済および巨大科学技術を発展させてき

た人間がその人工環境を制御できず自らを存続の危機に陥れつつある今、人間と他（他者、科学技術、社会、文明、自然、地球、未来世代）との関係性は如何にあるべきかを生物的側面と社会的側面から議論されたと総括することができる。そこでの議論の背景には人間の欲望、自由意思、責任、倫理、理性のあり方が論点となっていると考えられ、これらの論点を関連付けてシンポジウムの副題「人間（ヒト）、未来への選択」を議論する必要があった。そのためには、人間の生物的、社会文化的、精神的側面をカバーし、人間の生存と進化と未来を議論できる KW が必要であることに思い至った。しかもその KW が広く共有されるためには身近で、一般的かつ抽象度の高いものである必要があった。しかし、一般的かつ抽象的な言葉はしばしば多義的で具体との関係が不明であり、実りある総合のための KW としては不向きな場合がある。以上のことを考慮して、シンポジウムの4つの講演から抽出した各論点をカバーし、これらをシンポジウムで提示した KW「人間、ヒト、未来への選択」と関連付けて総合を実践できる KW は何かを探してみた。

3. 各講演を関連付けるキーワード（KW）として「人間の自律」の抽出

人間の総合的理解のためには、その生物的側面と社会文化的側面を統合する概念が必要である。動物学・人間学者の小原秀雄氏はその概念をあらわす言葉として「人間（ヒト）」を用い自己家畜化論を展開した。人間（ヒト）とは生物としての「ヒト」を内包する社会文化的存在としての「人間」という意味である。氏は自己家畜化を人間が自ら改造した人工環境（社会化された自然）との相互作用による人間

独自の生物進化、自己発展の仕方と捉える（小原・岩城 1984）。すなわち、人間（ヒト）は道具、技術の発明により自らの欲望や意思に基づいて自然環境を改造する能力を持った結果、環境との相互作用、進化の方向に自らの欲望や意思が関係するようになったとする生物進化の人間（ヒト）的特殊型である。ただ、この概念はまだ十分理解されているとは言えず、その名称から誤解または一面的理解も多い。それゆえ、人間の総合的理解のために必須と思われるこれら「人間（ヒト）」および「自己家畜化」という言葉は必ずしも一般的で身近なものとはなっていない。そこで、より身近で人間の生物的と社会文化的両面に広く使用され、人間の欲望、自由意志、責任、理性をカバーし、人間の生存、進化と未来を議論することが可能と思われる KW として、「自律」という言葉を候補として取り上げてみたい。

この自律という言葉は一般には「自分の行為を主体的に規制すること、外部からの支配や制御から脱して、自身の立てた規範に従って行動すること」

（広辞苑）と解されている。そして、人間を含む生物一般にみられる他者に依存せず生活する意味での「自立」とは区別される。哲学では、カント倫理学において根本をなす概念といわれ、実践理性が理性以外の外的権威や自然的欲望には拘束されず、自らの普遍的道德性を立ててこれに従うことを指す。さらに、何らかの文化領域が他のものの手段ではなく、それ自体のうちに独立の目的・意義・価値をもつこととされている。このように人文社会学系では人間の精神的文化的自律性を意味している。一方、生物、医学においては環境変化に対応し体内の恒常性を保つ機能として理解されており、免疫機能やホルモン・自律神経系がそれである。

このように、人間において「自律」という言葉は身体的、精神的ならびに社会的文化的諸要素を含み、身近にかつ広い範囲で共有されやすい一般的抽象概念ということができる。

ところで、この自律という概念は生物進化的に具体に還元できる抽象的概念であり、人間（ヒト）を含む生命を理解する上で核心的概念でもある。例えば、生命とは「外界と膜で隔離され、環境から物質を取り込み膜内で物質代謝を行い、成長、増殖を行う自律系」であるといわれ、NASA は生命を「進化を遂行することができる自律的化学システム」と定義している（1994 年）。また、多様な生物種をめぐる環境、個体、種間の関係である生態系も食物連鎖のバランスを保つ自律系である。野生動物は他（他者、餌・獲物、外敵、自然など）との関係において自律的な行動能力を持ち、自らの個体と種社会を保持し進化してきた。そして、脊椎動物、哺乳類、霊長類に至る進化の特徴は自然環境からの相対的独立性の高次化といえる（小原 1979）。具体的には、ホメオスタシス（恒常性）の発達、自律神経系および中枢神経系の発達と大脳化、恒温、哺乳などであり、これらは自律機能の進化すなわち他との関係性の進化とみることができる。その進化の流れは人間（ヒト）に至って、道具・技術による自然の改造能力と言語による抽象化能力の獲得で頂点に至っている。このように、「自律」という概念は生物進化的背景を持ち、生物が自らの主体性と他との関係性を通して個体維持ならびに種の保持、進化を可能にする必須の機能を意味する。それゆえ、自律という KW は、4 つの講演内容で共通の背景として抽出した「人間の欲望、自由意思、責任、理性のあり方」をシンポジウム副題の「人間（ヒト）・未来への選択」

に繋げるための不可欠な KW と思われる。

4. 人間の言語と自由・自由意志と自律について

ヒトへの進化は環境からの相対的独立性の高次化、自律機能の進化であると先に述べたが、人間は言語による抽象化機能によって動物的感情・情動から相対的に独立した精神的自律を獲得した。そして、具体・現実から乖離できる精神的自律性によって観念の世界、自由の観念を持つようになったが、この具体・現実から乖離した観念は自然および社会の法則性から逸脱することも可能にした。その結果、言語は物事の本質に近づくこともできれば本質から遠ざけ（か）ることもできる真実と虚構のための両刃の剣となった。前述の佐藤氏の「近代の共同主観に基づく人間観」に対する批判は、言語の虚構性により人間の生物的ヒト性とは矛盾する観念的人間観が近代以降支配的になっていることに対する批判と受け止められる。すなわち、近代的精神および人間観は形而上的、共同主観的幻想であり、このことが人間の本質から遠ざかる自律なき自由と欲望を生み出したとする主張と理解することができる。木村氏の言う「近代的人間観の虚構から生じた人間の制御なき欲望」も同様と考えられる。ただし、人間における自由そしてそれを根拠としての人権、尊厳、自由意志の観念を、人間（ヒト）が環境からの高度な独立性・自律性を獲得したことを背景にして生まれた進化的産物として捉える必要もある。すなわち、人間が他との関係性の中で個体の維持と種の保持、進化を通して獲得した自律的欲望（欲求）および自律的自由の側面である。現代の人間観・自由観には言語の相反する 2 つの機能、すなわち本質に向かう機能と遠ざけ（か）る機能による 2 つの自由・自由

意志が混交しているのではないだろうか。

総合人間学会の創始者の1人である小林直樹氏が「人間は生物である、けれども、他の生物とは異なり理性、自由意思、尊厳がある」と述べている（小林 2003）ことに対して、佐藤氏は「けれども」は他の生物との不連続性を強調するもので、連続性を意味する「だから」というべきではないかと批判している（佐藤 2005）。このことは、総合人間学における人間の「自由、自由意思」の概念を観念的主観的ではなく進化的に理解することの重要性を示唆する議論といえる（小林 2010、佐藤 2010）。

個人における自律の発達も同様に言語を通して行われる。人間学の故近藤薫樹氏は「人間の感情・思考は、幼児期の触れて感じる動物的感情・情動から言語的思考・知性にコントロールされた情操に発達する。獲得された情操は人間の感情・情動にフィードバック的に作用し、感じ方（感情・情動）を変化、発達させる」（近藤 1988）と述べている。情操は情を操る精神作用であり、自律的感情・情動ともいえる精神の自律機能である。この感情・情動と情操の相互作用が人間の感情の発達メカニズムであり、感情・情動が自己生存・自己中心的なものから知性による自律的な情操へ向かうことが人間の精神的発達といえる。情操の高次なものが他者への配慮、責任であり、愛は至高の情操ともいわれる（同書）。真、善、美、聖なども高次な情操といえる。人間の自律性は他との関係性、自然と社会の法則性の言語的理解を通して発達し、他への配慮、責任を伴う情操を基礎にした人間独自の能力であり、社会生活を営み観念的世界を持つ人間（ヒト）の生存・進化に極めて重要な能力と考えられる。松本、野家両氏の専門家のあり方、専門性・科学技術のあり方やそれらの

社会的責任についての議論をこの「人間の自律」の視点から考察することが重要と思われる。さらに、木村、佐藤両氏のいう抑制すべき人間の欲望とは人間（ヒト）の本質から遠ざかる「自律なき自由」の観念から生まれる自律なき欲望を指していると考えられるが、人間の情動や欲望は抑制するのではなく、人間における自律的自由の進化史的理解を通し知性によって自律的欲望、情操に発達させるべきものとしてとらえる必要がある。「人間は自律するとき最も自由である」（同書）という近藤氏の言葉は人間における自律と自由の関係、さらには人間の倫理・道徳の進化的本質的理解を可能にするものと思われる。

言語のもう一つの役割として、全体の中から認識された部分を切り取って概念化する機能がある。生物は自己の生存に必要な環境条件だけを認識し、その切り取られた環世界で生存している。例えば、ある種のダニは視覚も聴覚の世界も持たず、嗅覚の世界だけで生きており、下を通る動物の汗（酪酸）の匂いによりのみ反応し木から飛び降りその動物の血を吸い生存している。つまり、この種のダニにとっての認識される世界とは酪酸の匂いという限られた世界で、この環境がこの生物種の環世界ということになる（ユクスキュル・クリサート 1995）。脊椎動物は中枢神経系、脳の進化にみられるように情報の集中化、統合性の強化を高め、自らの認識する環世界を拡大させる方向に進化した。人間の言語もその流れの上で獲得された高度な機能であるが、しかしそれもやはり全体の中で認識された部分のみを切り取って概念化する道具にすぎない。従って、精神世界を持ち高度な科学技術を発達させた人間であっても例外ではなく他の生物と同様に自己が認識できる範囲

内の環世界に生きており、自己および他（他者、環境、社会、世界、自然、宇宙）の認識には限界がある。ただし、言語には体験しないことも理解し共感できる機能があるので、人間の場合は言語的思考によって自己と他との関係性の認識すなわち環世界を拡大することによって全体像に近づくこと、佐藤氏の言う「自然を丸ごと相手にする」ことは可能と思われる。

以上のように、言語によって精神的自律そして自由・自由意志を獲得し、また、自らの環世界を拡大してきた人間（ヒト）においても、他との関係性の中で発達または進化する自律の役割は本質的に重要と考えられる。それゆえ、自己と他を結ぶ KW「人間の自律」は、人間（ヒト）の諸要素を総合化してその全体像ならびに本質へ接近するために重要な役割を果たすと考えられる。

5. 一般的かつ本質的で抽象度の高いキーワード（KW）による総合の高次化

言葉には具体的なものからより本質的で抽象度の高いもの、個別的なものから一般的なものがある。例えば、私は長谷場健という個人であり具体であるが、私を含む概念は日本人、男性、人間、霊長類、哺乳類、脊椎動物、動物、生物、生命、物質の順に一般性、抽象度が高まる。それゆえ、各階層において含まれる個・具体または分類される要素も順に多くなり、共通性および本質的なものの一般性、抽象度も高まる。そして、ここではそれぞれの階層で具体と抽象、個と一般の関係が明らかであり、本質認識の階層的深化が理解できる。KW に関しても具体的なものから抽象的なもの、個別的なものから一般的なものがあり、KW の具体と抽象または個別と一

般の関係のなかでの階層がそれによる総合の階層を規定し、抽象度、一般性の高まりによって総合の高次化が達成されるものと考えられる。

「自律」という KW は生命の本質および人間（ヒト）の自由意志の進化的本質を表す言葉といえるが、人間が言語の獲得により本質から遠ざかる能力を持ったことが人間の生命体としての自律性を危うくしていると思われる。木村氏は「人間の自己家畜化に働く自己人為淘汰・自己選択には目的も目指す方向性もなかった。あったのは欲望の限りなき連鎖である。」と述べている。すなわち、人間（ヒト）が言語により自由の概念を獲得したが、その形而上的自由意志に支配された自律なき自己家畜化の結果が地球の危機であり、自然から乖離し人工物に囲まれた生活の中で心身に負の症状を呈する自己ペット化（小原・羽仁 1995）である。これらの議論に KW「人間の自律」を適用してみると、「人間（ヒト）・未来への選択」言い換えれば「自己家畜化の未来」には人間の「自律ある自己家畜化」の選択が人間（ヒト）にとって生存、進化を保証するといえる。この自律ある自己家畜化とは、小原氏のいう「自然ならびに社会の法則に沿う人間（ヒト）にとってナチュラルな環境、文明」（小原 2007）と重なる。そして、言語によって他との関係性の本質的理解に接近できる人間は、人間とは何か、何処から来て何処に行くのか、如何にあるべきかを問いの中で、「自律ある自由」を羅針盤にすることによって人間（ヒト）にとってよりナチュラルな未来文明を選択することが可能になると思われる。

このように、「人間の自律」のような人間（ヒト）の核心を捉え、しかも身近で共有範囲の広い抽象度の高い KW は、人間の諸側面を広く結びつけその

全体像と本質の理解に迫り、未来を展望するための高次の総合を可能にするものと考えられる。

6. 総合の方法論とキーワード (KW) の役割

総合の方法論における KW の役割に関して、現在私は以下のような試論を持っている。すなわち、総合の第一段階として、対象および現実の現象を客観的に把握し、それを各要因、要素に分析し、異質性、同質性、連続性、非連続性などを比較し、相対化し、空間的、時間的、進化・歴史的、地理的に構造化して概念化する。このようにして得られた諸概念は次の階層の総合化では諸要素となり、それらを構造化することによってより高次の概念化、総合化、理論化が達せられる。このように分析と総合は、各階層で表裏となって階層性を持つ全体像の理解に近づく手段である。この中で KW は総合の各階層で具体的なものからより本質的で抽象度の高いもの、個別的なものから一般的なものへ移行し、要素と要素、論旨と論旨、概念と概念を繋ぎ、分類と構造化を通して総合の高次化、階層的発展に寄与すると考えられる。

なお、選択された一般的かつ抽象度の高い KW が、前述したように具体的に還元できる抽象、個に錨を下した一般でなければ、穴見氏の言う「抽象論に墮す」ことになる（穴見 2016）。人間を含め生物の生存・進化において具体的に還元される核心的抽象概念である KW「人間の自律」はその杞憂を回避できる有効な KW と考えられる。

7. 総合人間学会創立 10 周年記念フォーラム「この 10 年の試みから総合人間学における〈総合〉を問う」にパネリストとして参加して

2016 年度に開催された「学会 10 周年記念フォーラム」では総合の方法論が議論され、総合を準備するためのキーワード（長谷場 本論文）、問い（大倉 2016）、中間理論（上柿 2016）がそれぞれテーマとなった。その時の内容およびそれら方法論の総合における役割については穴見氏の論文に総括されている（穴見 2016）。

ここではそのフォーラムを振り返って私見として思うところを少し述べてみたい。まず、上記の 3 つの方法論の総合における役割の違いに関して、私はその理解が十分ではないことを自覚した上で現在のところ以下のように考えている。すなわち、それらの名称は異なっているが、各々の役割は厳密には区別はできず重なり合う部分があるのではないかと考えている。例えば、もし「人間の自律」という抽象的な KW が具体と個別への還元がまだ明らかでないとすれば「人間の自律とは何か」という問いになり、具体および個別への還元が保証されていれば中間理論にもなり得る。他の抽象度、一般性の高い KW も同様である。いずれの方法を用いるにせよ、要は結果として総合実践の成果が得られたかどうか、すなわち対象を見る視野が広がり、よりその全体像が見えるようになり、本質の理解が深まったかどうかによって判断される。

ところで、当該フォーラムでの我々の発表内容に関して、フロアーからいくつかの批判が出された。まず、「総合は問題解決の手段であるはずなのに本フォーラムでは総合が目的となっている」という批判である。現時点での私の意見は、総合は対象を見る視野を広げ、その全体像を描き、その本質を理解するための手段であり、その全体像、本質に近づくことなしには問題の解決はないという意味で、フロ

アーからの「総合は手段である」との意見は正しいといえる。しかし、本フォーラムでは総合のための方法論を議論する場であったから、総合は目的であったわけである。また、私の発表に対して「発表内容は総合ではなく分析である」との批判があったが、私はその批判の真意を今でもまだ理解できていない。私の中では、7 回大会シンポジウムでの 4 つの講演内容を分析し、「人間の自律」という新たな KW を用いてそれらの要素を関連付け、人間（ヒト）の未来が展望できるようになったのではないかと考えている。私自身は、総合と分析の関係に関しては前節で簡単に触れたようにそれらは階層により転化するものと考えている。ただ、総合と分析の関係に関する議論は総合の意味論と共に総合に関する認識を深める上で重要と思われるので、今後じっくりと議論する機会が必要と思われる。

おわりに

前述のように、第 7 回大会シンポジウムのパネリストらの講演内容を分析し、それらの論点として現代の巨大科学技術をめぐる社会制度、社会的責任、次世代を含む人間の倫理、人間の欲望、自由、自由意志などのあり方を抽出した結果、「人間の自律」という KW がこれらを総合し人間の未来を展望するために有効であることがわかった。振り返ってみれば、この KW は抽象度の高いものであるが身近で一般的にイメージでき広く共有可能な KW であることから、7 回大会シンポジウムの総合を準備する上でより有効であったのではないと思われる。しかし、7 回シンポジウムの準備段階では自己家畜化と人間の自律との関係は見えておらず、今後のシンポジウムでの総合を準備する KW として有効に

なると思われる。また、この KW は、人間（ヒト）とその未来のあり方を考える上でも本質的に重要な概念であることから、第 7 回大会シンポジウムと第 8 回大会シンポジウム「人間関係の新しい紡ぎ方—3.11 を受け止めて」との架橋、さらには、各々のシンポジウムの実践結果や他の人間論との総合の架け橋となると思われる。その意味でもこのような身近で一般的かつ本質的で抽象度の高い KW の活用は「総合の高次化、階層的発展」への道を開くものではないだろうか。それは、シンポジウム実践の成果を補い増強するという意味において、シンポジウム自体における総合の実践にも劣らない価値があるように思う。

以上のように、総合の実践は、シンポジウムに留まらず、その後の活動でさらに深化させ、理論化し、その理論の下で再び実践することが総合人間学の方法論として重要と思われる。そして、分析と総合の階層的発展、実践と理論の往復運動によって対象の全体像および本質へ近づくことができるものと考えられる。

参考文献

- 穴見慎一（2017）『「学会創立 10 周年記念フォーラム」のための弁明』総合人間学（電子ジャーナル版）、総合人間学会、第 11 号第 1 部
- 上柿崇英（2017）「総合人間学と「中間理論」の方法論」『総合人間学（電子ジャーナル版）』総合人間学会、第 11 号第 1 部
- 大倉茂（2017）「若手シンポジウムの実践から〈総合〉を考える一問いの共有と総合人間学史の構築」『総合人間学（電子ジャーナル版）』総合人間学会、第 11 号第 1 部

- 小原秀雄（1979）『哺乳類』，岩波新書
- 小原秀雄・岩城正夫（1984）『自己家畜化論－人間
をどう見るか②』，群羊社
- 小原秀雄，羽仁進（1995）『ペット化する現代人』，
日本放送協会
- 小原秀雄（2007）『人間（ヒト）学の展望』，第7
章，明石書店
- 小林直樹（2003）『法の人間学的考察』，岩波書店
- 小林直樹（2010）『「法の人間学」をめぐる若干の
問題－佐藤節子教授の提起と批判に答えて』，専
修大学社会科学研究所「社会科学年報」第44巻
- 近藤薫樹（1988）『さて人間とはなにか』，日
本福祉大学生生活協同組合
- 佐藤節子（2005）『小林直樹著「法の人間学的考察」
の紹介と批判』，青山法学論集第46巻4号
- 佐藤節子（2010）『試論 もう一つの「法の人間学」
－小林直樹教授の反論に答える』，青山法学論集
第52巻第2号
- 松本三和夫（2012）『構造災－科学技術社会に潜む
危険』，岩波新書
- ユクスキュル・クリサート（2005）『生物から見た
世界』，日高敏隆・羽田節子訳，岩波文庫

[はせば たけし／神奈川歯科大学・日本医科大学
（非常勤）／社会医学]